

ずいそう

## 「東日本大震災」災害派遣体験記

谷津俊幸



私はその時、福島県での訓練を終え、部隊の駐屯する山形県東根市にある神町駐屯地へ帰るため東北自動車道を北上中でした。大きな揺れに危険を感じ、車両を停車させたところは盛り土区間で揺れの振幅も大きく、法面沿いに立つ防音壁も大きく揺れ、今にも我々の車両に倒れてくるのではないかと、不安に思うほどの揺れでした。

その後、通常は約2時間で着くところ約6時間を要して、何とか無事に駐屯地に帰ることが出来ました。これには、停電により信号が機能せず、余震が続き情報も伝わらない中であっても、大きな混乱を起こさずルールを守り、互いに譲り合う日本人としての精神・道徳心を深く垣間見た次第です。

災害派遣により最初に向かったのは宮城県南三陸町です。町の中心部に向かう主要道路は海岸沿いの国道45号線と、内陸部から峠を越える国道398号線に限定されますが、国道45号線は津波の被害により、南北から寸断され、国道398号線も土砂崩れにより通行困難であり、救助・救援部隊が被災地に進入できないため、自衛隊の重機で国道398号線沿いの土砂を除去し、進入路を確保して欲しいという要望からです。

早速、偵察班を編成し向かいましたが、行けども土砂崩れた痕跡はなく、峠を越え南三陸町の集落が見え始めてきた途端、衝撃的な光景が目飛び込んできました。土砂崩れによる土砂ではなく、津波により押し流されてきた家屋を始め、ありとあらゆる物が、道路は元より周辺の地域に押し流されて漂着し、堆く積み重なっていたのです。地図で確認すれば海岸線はまだ3km以上も先のはずなのに…。本当に信じがたい光景でした。

我々の部隊は、施設科職種の部隊であり、ブルドーザ、油圧ショベル（バックホウ）やロードローラなどを保有しています。

警察・消防等の救助・救援部隊が多数来ていましたが、津波による漂着物により行く手を阻まれ、十分な活動ができていなかったことから、道路上の漂着物を除去して、交通を確保することを最優先と考え、活動を開始しました。

その後、気仙沼市を始め女川町、石巻市牡鹿総合支所管内を転々としながら南三陸町での活動同様、道路上の漂着物の除去を主体とした作業を実施し、救助・

救援活動を促進させてきました。これは政府の自衛隊10万人態勢との方針の下、全国から派遣されてきた部隊が逐次、被災地域に投入され、それらの部隊に任務を引き継ぎながら、自衛隊がまだ派遣されていない地域に我々郷土部隊が転用されていったからです。所謂、自衛隊災害派遣部隊の先駆け（Pioneer）としての役割とでもいいますか、全国から投入された、より大きな部隊との橋渡しのような任務でした。

自衛隊の10万人態勢も整った頃、我々は石巻市街地西部に活動地域を移していました。石巻市は我々の部隊が、その後約4ヶ月にわたって活動することになり、より一層思い入れのある地となりました。石巻市は宮城県沿岸北部地域において最大の街であったことから、行方不明者の数、漂着した瓦礫の量など、どれをとっても桁違いに大きく、我々の保有している重機での活動には限界がありました。そのような中、要望・調整により、行政機関が民間の建設業者と契約した、油圧ショベル（バックホウ）やダンプトラックを、我々自衛隊の活動に連携させていただくようになりました。重機の規格も我々の要望に沿って、大小いろいろ準備していただき、作業の効率化を図ることができました。特に、市街地ということで、自衛隊の器材では困難な、狭隘な路地が大部分を占めていたことから、本当に助かりました。作業も人命救助・行方不明者の搜索活動ということで、何処にいるか分からない不明者を傷つけないよう、細心の注意を払って行いましたが、民間の重機オペレータの方にもその趣旨を理解していただき、自衛隊が行う手作業や重機での作業にあわせ、我々の指示によく従っていただくとともに、重機を操作する技量も非常に高く、順調に作業を進捗させることができました。

最後に、我々の任務を無事に達成できたのは、被災された住民の方々を始め、国民の皆様からの期待を強く感じながら、強い使命感をもって任務に臨むことができたからではないかと考えています。これからも「国民の最後の砦」として信頼されるよう、日頃から高い危機意識を持って即応性を維持し、如何なる任務をも無事達成できるよう訓練等に取り組み、国民の皆様の負託に応える所存であります。

——やつ としゆき 陸上自衛隊 第6施設大隊 第1中隊長  
(平成24年3月現在)——